《論評》

パソコン時代のインド学（二）

―サンスクリット文献の電子テキスト、その有用性と問題点―

金沢篤

図書館は無限であり周期的である。どの方向でもよい、永遠の旅人がそこを横切ったとすると、彼は数世紀後に、おなじ書物がおなじ無秩序さでくり返し現われることを確認するだろう（くり返されれば、無秩序も秩序に、「秩序」そのものになるはずだ）。この粋な希望のおかげで、わたしの孤独も華やぐのである。[1]

（J・L・ボルヘス）

はじめに

本誌本欄に「パソコン時代のインド学―〈CATUR〉試用記―」[2]を発表してから、すでに十年が経過した。一昔も前のこと、感慨無量である。その間に、一般家庭へのパソコンの普及は予期せぬまでに進んだ。その利用法も、美しい文書作成といった単なるワープロ作業などには止まらない。個人の生活そのものに深く根差し、かつ外に向けて大きく開かれた「Eメールとインターネット生活」という形で、めざましい変貌を遂げたのである。いたるところに、パソコンや通信、インターネットに関連する、その手の文字が氾濫している。「禰子も釋子もインターネット！」世の中まことに「情報化社会」である。

だが、この十年間に実のところ何が変わったのか？　筆者個人のことで言うならば、基本的には何も変わっていない、と言いたい。当時使っていた三種類のパソコンは二種類に統合され、[3]ウィンドウズ・マシンにしてもマッキントッシュにしても、その性能たるや、泣けるほどの、いや笑ってしまうほどの向上を見た。何十分もかかった作業も、今や、文字通りあっという間に終わってしまうのである。パソコンに向き合っている時間は、当時とさほど変わらないし、Eメールもネットワーク利用も、筆者の生活の中に占める比率は、基本的には、当時とさほど変わっていない。職場と自宅に、ほぼ同じパソコン環境があるという点でも昔と変わらない。だから、今となっては、いささかつつましく、いささか時代遅れの観すらある「パソコン時代のインド学」という昔ながらのこのタイトルも、筆者個人にとっては、何の違和感もない。

ハンディなノート型パソコンを常時携帯して、電車の中でもパソコン作業をする、などという習慣は相変わらずないし、今やそうした作業を現実的に支えてくれるかの、異常な普及ぶりを示している携帯電話の必要性にすら、昔同様全く迫られていないのである。

だが、サンスクリット文献の解読を中心とするインド学研究者としての筆者には、〈ＣＡＴＵＲ〉試用記を書いて以後のこの十年、やはりいくつかの変化は確実にあった。即ち、当時ＣＡＴＵＲが可能にしてくれた夢のような世界、パソコン上でのデーヴァナーガリー文字の使用は、ＣＡＴＵＲなしでも、今や簡単にごく手軽に実現できることになった、という点である。種々に出回っているデーヴァナーガリー・フォントを、自分のパソコンに装備しさえすれば、普通のワープロやエディタで、キーボードからダイレクトに、それを入力出来るようになっている。パソコンでの文字や言語の操作が、驚くほどに融通のきくものとなり、こうしたインド系の文字に限らず、望みさえすれば、右書き文字も左書き文字も自在、高品質の各種プリンタを使えば、美しい印字も思いのままである。また一つには、筆者のパソコンの大容量ＨＤの中の、電子テキストの蓄積が進んだ点であろうか。十年前の時点では、なかったも同然のサンスクリット文献の電子テキストが、かなり増えたということ、嬉しいことである。そして、さらに、サンスクリット文献の電子テキストを使って、《索引》(Word-Index) を自動的に生成するための、軽快この上ないパソコン・ソフト集〈ＳＳ-ＴＯＯＬＳ〉を持ったという点も、筆者個人にとっては特筆すべき出来事である。特にこのＳＳ-ＴＯＯＬＳに関しては、もっと早くに報告すべきであり、その機会にも事欠かなかったのだが、これまで遂にそれをこうした論文の形では具体化出来なかった。(4)

サンスクリット文献学といった自分の研究に引きつけて、十年一日の如く、のんびりとごくパーソナルな形でパソコンと付き合ってきたに過ぎない筆者だが、昨年度、幸いなことに、駒澤大学特別研究助成金を仰いで、「インド哲学文献の電子テキスト化に関する研究―『梵語格言・喩例用例事典』作成の試み―」に従事することが出来た。節目の年、せっかくの機会でもあり、この十年間のパソコンに関わるささやかな個人的経験を踏まえ、本稿では、その研究成果を報告したい。併せて、「パソコン時代のインド学」と言った際に、常に中心に置かれるべきサンスクリット文献の電子テキスト（E-Text)、及びその有用性と問題点について、若干の私見を述べてみたい。

サンスクリット文献の電子テキスト

ありとあらゆるサンスクリット文献の電子テキストが欲し

い！　これが、筆者などの見果てぬ夢である。ボルヘスではないが、バベルの図書館の、サンスクリット部門だけでも、自分のパソコンの中に構築したい！　これが、筆者などが長年密かに抱き続けてきた夢である。この十年間で、それが、果たしてどれほどに実現されたか？　先にも記した通り、ゼロから出発したことを思えば、かなりの数量の電子テキストを所有するに到った、とは言える。だが、想定されるライブラリー全体の規模から見ると、未だ情けないほどに甚だ貧弱な状況である。実際の大学図書館にしても、サンスクリットのテキストに関してはお寒い限り、この本がない、あの本がない、あの本が欲しい、この本はないか、といつも、愚痴を零すばかりだ。売り買いが前提であるような書物に対して、欲しいからといって、すぐに買ってこれないのが、電子テキストである。お金がなければ、図書館の蔵書を充実させることはできないが、逆に、お金がなくても、蔵書を増やし得るのが電子図書館だ、とも言える。サンスクリット文献の電子テキストの売り買いは、未だかなり低調である。(5)

さて、電子テキスト、電子テキストと人はよく口にするのだが、なぜ、電子テキストがそうまで必要なのだろうか？　一つには、印刷された本に比べて、圧倒的に軽い、嵩張らない、場所をとらない。したがって、持ち運びが便利である。筆者は、パソコンを携帯する習慣を持たないが、その気になったら、小さなノート型パソコンのＨＤに、自分の所有する全ての電子テキストを入れて常時持ち運べる。通信機能を備えた小型パソコンを携帯することは、電子テキスト図書館一つをまるごと鞄に入れて持ち歩いているようなものである。これは、もう圧倒的に凄いことだ。そして、その気になれば、いつでも、どこででも、開いて直ちに参照できるのである。便利なこと、この上ない。また、電子テキストだと、書架から取り出す手間がかからないばかりか、テキストを引用する場合にも、一々書き写す手間がかからない。コピー＆ペーストで直ちにそれが可能になる。手書きの場合に往々にして起こりがちな、スクライヴァルエラーからも、比較的自由である。また、完全コピーを作って、他の人に分かち与えることも簡単である。それを教材に使う場合にも、紙にコピーしたりする手間などを節約できる。だが極微文献学を目指す筆者にとっての、電子テキストのメリットは、何よりも、ターゲットとなる単語の用例を簡単に余さず網羅的に取得出来る点である。サンスクリット文を読んでいって、問題となる単語に逢着した場合、その単語の他の用例も簡単に知れる。ワープロやエディタやシステムに標準で装備された検索機能を使うもよし、各種豊富に出回っている検索専門の優れたパソコン・ソフトを使うもよし、である。

電子テキストだと、一発で、目的の単語の全用例を探し出

すことが出来る。紙の上の本だと、目的の単語を求めて、全篇通覧しなければならない。判別しにくい膨大な文字列の中から、目的の文字列だけを見つけだすことは、相当に骨の折れる作業である。見落としもあるに違いない。それを代行してくれるのが、パソコンの中の電子テキストを相手にした検索機能である。これには、見落としがないし、とにかく捜す能力が凄い、半端ではない。したがって、何としても、「電子テキストが欲しい！」ということになる。パソコンを活用してのインド学・仏教学研究は、すべて、この電子テキストを前提としてのものである、と言うのは、この点を指してのものだ。

　では、そうした、サンスクリット文献の電子テキストは、どのようにして作られるか？　ごく普通には、紙の上にあるテキストに基づいて、既に公刊されている書物に基づいて作られる。「サンスクリット文献の電子テキスト化！」デーヴァナーガリー文字などで印刷された紙の上のテキストを目で追いながら、人手によって、ローマ字キーボードを用いて、一文字一文字入力して作られるのである。あるいは、スキャナー＆ＯＣＲソフトを用いて、その作業すらも、コンピュータに代行させることが出来るかも知れない。翻字の仕方、入力の仕方は何でも構わない[6]、その方式自体が、明確になってさえいれば、どのような文字を用いて、どのような形式に作られていても、「電子テキストは電子テキスト！」それに対して、検索機能は使えるし、それの併用機能と言うべき置換機能だって使える筈である。当然ながら、電子テキストの品質は千差万別であろう。良いテキスト刊本と悪いテキスト刊本があるように、電子テキストにも、良し悪しがある。どうせなら、良い電子テキストが欲しい。また品質の良し悪しの他にも、自分の好み・趣味に適ったものとそうでないものがある。いずれにしても、電子テキストは、ないよりはマシである。問題は複雑きわまりないが、それでも「電子テキストが欲しい！」

　こうした電子テキストは、誰にでも作ることが可能である。サンスクリットの表記文字や表記法、デーヴァナーガリー文字などに通じていさえすれば、誰にでも、電子テキストは作成出来るのである、時間と労力をかけて。だが、デーヴァナーガリー文字に馴染み始めのサンスクリットの初学者が、果たして、良質の電子テキストの入力者たり得るだろうか？　さらにまた、サンスクリット文献の電子テキストを必要としているのは、誰なのか？　専門の研究者、インド学者である。自在にサンスクリットを読みこなすことの出来る者のみが、サンスクリット文献の電子テキストを必要としているのである。そうした者たちの誰もが、筆者のようにバベル電子図書館を切望しているわけではない、と思う。研究者がふつうに

欲しているのは、自分の関心のあるサンスクリット文献の電子テキストだ。あれば、持っていてもいいけれど、使わないもの読まないものは、なくても差し支えない、困らない。そして、研究者本人が自分に必要なそのテキストを自分自身のために電子化しようと考えるのである。運がよければ、それが一般に公開される、他者が時間と労力をかけて作った電子テキストを労せずして入手出来ることもある。筆者の手許にあるサンスクリット文献の電子テキストとは、大半はそうして入手したものだ。他は、筆者自身が、自分の必要な文献を、目をしょぼしょぼさせ、労力と時間をかけてコツコツと電子化したものばかりである。存在することが知れても、利用することの出来ない電子テキストがごまんと存在する。切歯扼腕するのは、書物、紙の上のテキストの場合と同様である。是非、欲しいと思っても、本屋では売っていないし、コピーであれ、入手が容易でない書物の場合とやはり同じであろう。本を持っていることが、この分野の研究では、とにかくも重要なことである。電子テキストを所有している者は、迷わず、「万人の利用に供すべく直ちに公開せよ！」そう、声高に叫びたいところだが、それをしない。何故か？　電子テキストを作成するのに、時間と労力がかかっていることを痛いほど承知しているからだ。それらは、すべて、お金に換算できるものと言える。だが、知識の量と理解力の深さによってでしか作られ得ない高品質の電子テキストは、もしかしたら、お金では決して買えないものなのかも知れない。

例えば、インド文化の理解に欠かせない有名な『カーマスートラ』を今日読もうとする。どうするか？　テキストを購入するわけだが、ヤショーダラによる注釈『ジャヤマンガラー』の付いた刊本、サンスクリット原典が比較的容易に入手できる、何種類も[7]。筆者などが、古びた杜陵書院版岩本裕訳[8]を手がかりに、それを読もうとした時は、いわゆるベナレス本、ヒンディー語訳まで付いているカーシー・サンスクリット・シリーズの一冊しか書店にはなかった。そして文法書・辞典と首っ引きで読む。だが、岩本訳の底本は、一八九一年ボンベイで出版されたニルナヤ版テキスト。むろん今日でも、新本は入手できない。そんな時、インターネット上には、ニルナヤ版『カーマスートラ』の電子テキストが、そっと、研究者を手招きしているのである。

VAtsyAyana, KAmasUtram
digitalized by Mizue Sugita
September 1, 1998
based on the edition of
KAmasUtram with commentary of yazodhara,
dvitIyaM　saMskaraNam,　nirNayasAgara

yantrAlaya, 1900
with reference to
KAmasUtram edited by ZrIdevduTTa ZAstrI,
Chaukhambha Sanskrit Sansthan, Varanasi,
saMvat 2049

一九〇〇年に出版された、ニルナヤサーガラ（ボンベイ）版第二版を電子テキスト化した旨、明記されている。入力者は“Mizue Sugita”、おそらく『ブリハットサンヒター』の立派な《翻訳》[9]を出版されている杉田瑞枝さんのことだろう。ああ、あの長い難解なテキストを電子化して、しかも公開して下さった。有難いことである。ニルナヤ版の頁付けもなされているし、筆者などが所有するベナレス本の章段との対比もなされている。ただ惜しむらくは、この電子テキストでは、複合語とそうでないものとの区別が付けられていない。サンスクリットを解する人間によって入力されたのだとすれば、複合語の情報くらいは、その電子テキストの中に埋め込んでおいて欲しかった。《検索》用の電子テキストとしては、むろん万全である。特殊用語の頻出する『カーマスートラ』である。岩本訳を読んでも、ある箇所などは、ほとんど意味が通じない。各種翻訳を参照しながら、サンスクリット原典を注釈と共に、辛抱強く丹念に読んでいくしかない。重要そうな単語に出会う、特殊用語の微妙な意味の差異は辞典などを引いても、どうしたって決着が付けられない。他の用例を捜す。電子テキストがあれば、一発である。有難い。手許の刊本の方は、先にも記した通り、注釈『ジャヤマンガラー』にヒンディー語訳までついている分厚い一冊、単語を探し出すにもなかなかに骨が折れる。でも、電子テキストなら、すぐにもその語の別の用例を探し出すことができるのだ。ああ、有難い。杉田さんは、面識はないし、どのような方かも知れない。こんな便利なものを無料で使わせていただいて、感謝の気持ちが湧く。お目にかかったら、御礼を申し上げたい。

こうした場合、杉田さんによるこの『カーマスートラ』の電子テキストは、研究者としての筆者によって、どのように位置づけられるのか？　杉田さんが、拠り所とした『カーマスートラ』刊本を参照し得ない限り、筆者には、杉田さんの電子テキストが、ニルナヤ版を忠実に反映させたものだとは確認出来ない。当然ながら明らかな入力ミスも散見するのである。だが、ニルナヤ版刊本を入手して、その正当性を確認し得た暁には、電子テキストの方は、もはや、不要となってしまうのか？　否、テキストの解読に用いる、文法書、辞典、各種参考書、の位置におさまるのである。いわば、杉田さんの電子テキストは、『カーマスートラ』刊本の最も網羅的な《索

引』として位置づけられる。[10] 電子テキストの大半は、現段階では、独立には機能し得ない。常に、既に公刊されている紙の上のテキストに従属的にしか存在し得ないのである。[11]

さて、徳永宗雄氏による『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』の電子テキストを恵まれたことも、筆者にとっては特筆すべきことだ。筆者の来るべきバベル電子テキスト図書館の最も豪華な蔵書である。こんな素晴らしいものが、無料で使えるようになるなどとは、十年前には、夢にも思わなかった。特に前者、プーナで出版された原典批判版テキストに基づく『マハーバーラタ』の電子テキスト、まさに偉業と言う他ない。筆者自身所蔵はしていても、一生かかっても通読出来そうにないサンスクリット作品の一大雄編であるが、『マハーバーラタ』の電子テキストを入手できたということは、その一エピソードに過ぎない『ナラ王物語』や『サーヴィトリー物語』、また、インド人にとっての最愛の聖典『バガヴァッドギーター』の電子テキストを入手出来たということでもある。また、井狩彌助氏他による、『マヌ法典』を初めとする各種ダルマシャーストラ文献の電子テキストが、多数提供されている。精細な《索引》付きローマ字テキスト刊本[12]出版に続いて公けにされた。R.P. DasとR.E. Emmerickによる医学書『アシュターンガフリダヤ』の圧倒的な電子テキスト！　矢野道雄氏と杉田瑞枝さんによる大部の天文学書『ブリハットサンヒター』も、筆者の関心よりするならば、涙が出るほど嬉しい賜物である。さらに、Peter Schreinerによる『ブッダチャリタ』、徳永宗雄氏他によるカウティリヤ『実利論』[13]などなど。さらにまた、ダルマキールティ作品の立派な《索引》[14]を一度ならず出版された小野基氏によるダルマキールティのサンスクリット作品集も、筆者にとっては、天晴れ！　と言うべき労作である。どうしてこのような素敵なことが現実となり得たのか？　お金に還元できるかもしれない時間と労力をかけた、作業の結果としての電子テキストの数々が、心ある有為の研究者たちによって惜しげもなくネット上で公開されているのである。また、こうした、電子テキストの作成者に対しては、われわれは何で報いたらいいのだろうか？　活用させてもらうようになってから、何年も経つのに、一言の御礼も申し上げていない。いただいたら、お返しをするのが当たり前のような気もするが、筆者は、未だそれをしていない。

インド学研究者にとって、サンスクリット文献の電子テキストを作る作業、そして、その結果としての電子テキストを公開することは、一体どういう意味を持つのだろうか？　また、研究論文を書き、それを学術誌上に発表することとどう結びつくのか？　どう違うのか？　それよりも、電子テキストの作成・公開は、今日、果たして、研究業績と評価され得るのだろうか？　学術研究というものには、堅固性、確実性、

客観性、などが不可欠のような印象がある。インターネット上を浮遊しているかの電子テキストは、そうした学術研究というものの従来のイメージに、やや馴染まないところがあるような気がする。研究業績としては、どこか頼りないところがあるように思われるのだ。軽くて嵩張らない、複製が簡単に出来、加工が容易であるという、電子テキストの持つ大きな特徴も、研究というものが持つ堅固さにどこかそぐわない感じがするのである。もしかしたら、入手した電子テキストを基に、加工して、自分の作成した電子テキストのように仕立て上げることも可能かもしれない。こうした極めて下世話なトラブルのタネを提供するのも、電子テキストというものなのである。筆者が入手し、利用させてもらっている電子テキストのほとんどは、そのテキストの出自・素性がしっかりと明記されている。作成者も、その作成者が依拠した、テキスト刊本も明確になっているのが常である。パソコンを使用しない研究者が跡を絶たない現時点では、学術研究の新しい成果としての電子テキストは、まだ当分の間は、何か実体的などっしりとした堅固なものと結びついていることが、望まれているのかも知れない。

SS-TOOLS

世の中には、インド哲学文献に限っただけでも、既に相当量の電子テキストが蓄積されていると想像される。にも拘わらず、一般公開されているものの数量が驚くほどに少ないようなのは、研究業績としての電子テキストの位置づけ問題が、未だしっかりとクリアされていないことが一因であると考えられる。他者の作った数々の電子テキストを毎日のように利用させてもらっている筆者にしてからが、筆者自身の作成した電子テキストを公開していないのも、そのせいだ。いやもとい、吹けば飛ぶような小品ではあるが、筆者にしても、これまでに、二つのインド哲学文献の電子テキストを公開しているのである。いずれもヴェーダーンタ学派に属する思想家のもの、一つは、サルヴァジュニャアートマンの『パンチャプラクリヤー』(PAP.TXT)、もう一つはアーディシェーシャの『パラマールタサーラ』(PAS.TXT) である。[15] しかも九年も以前にである。筆者の所有する徳永氏による大電子テキスト『マハーバーラタ』は、“Completed on November 14, 1991 /Revised version : September 16, 1994” との記載を伴っている。一方筆者のは、一九九一・八・一六の日付を付して、筆者が当時参加していたリンガル・ネット (LINGUALNET)[16] 上に公開されたのである、以下のように始まるドキュメント・ファイルを添付した上で。

サンスクリットサンプルテキスト：

SS-TOOLSご案内（SST_SMPL. DOC）
═══ A. Kanazawa＝1991-08-16 ═══
本ファイルを含むSST_SMPL. LZHは、
(1)PAP.TXT　サンプル散文テキスト
(2)PAS.TXT　サンプル韻文テキスト
(3)INDEX.BAT　索引作成バッチ
(4)SST_SMPL. DOC　本ファイル
の4つのファイルから成りたっています。
(1)と(2)は、A.Nakazono氏のSS-TOOLSのためのサンプルテキストです。
どちらも小品ながらフルテキストですが、体力にものを言わせて私自身が入力したものですので、誰にも気兼ねなく存分に御活用下さい（本来最も望ましい活用法は、テキストを辞典片手にしっかり読まれること、二つのユニークなヴェーダーンタ哲学を勉強していただくことでしょうか。でもその際、私のタイプミス、解釈ミスなどに基づいて起るかもしれない災厄に関しては、私は一切責任を負いませんので、悪しからず）。

電子テキストの公開者の心情は、この引用拙文からも、容易に見てとれるに違いない。電子テキストの有用性を充分に自覚した上で、自分のなにがしかの努力の結果を、いわば自分以外の他者に、無償で提供しようとしたものであるが、「この電子テキストの入力者は自分である」と明記し、そして、そのテキストを公にすることが引き起こすかも知れないトラブルに対する様々ないいわけ（それが実際的に有効かどうかはともかくとして）などを、記載している場合が普通である。[17]

筆者がその電子テキスト二点を公開する気になったのは、一にも二にも、SS-TOOLS[18]のためである。『マハーバーラタ』などの超大作に比したら塵の如き小品であり、実際その電子テキスト作成には、時間も労力もほとんどかからなかった。そのせいもあったかも知れない。だが、筆者がそれらを迷わず直ちに公開したのは、そのSS-TOOLSこそが、学界の中で未だ正統な位置づけを与えられていないかのサンスクリット文献の電子テキスト作成を、確実堅固な研究業績に転じてくれるに違いない、と熱い期待と共に考えたせいである。学術研究にとって、限りなく大きな利益をもたらす筈の電子テキスト図書館を、一気に充実させるための魔法の杖であるように、当時の筆者には思われたのである。学界では、紙の上に印刷された、各種テキストの《索引》が、立派な著作物として位置づけられている。研究者にとって、《索引》を出版することは、その《翻訳》を出版することと同様、堅固な学術業績とみなされているのである。このSS-TOOLS

は、筆者により、そのようなものとして俄に構想された。当時同僚であったプログラミングの達人、中園昭彦氏に筆者が依頼して作ってもらったパソコン用ソフト（MS-DOS汎用）が、それなのである。筆者個人の特注ソフトと言うべきものだが、中園氏同意の上でソフトを公開する際に、そのソフトの有用性を試す、サンプル電子テキストとして、筆者は、俄仕立てのなけなしの自作電子テキストを公開したのであった（むろん、それらをアップロードする前に、筆者自身その電子テキストを使って何度も何度もそのソフトを試用したわけだが、その結果としての《索引》の一つが、本誌に別掲されているWord-Index to Sarvajñātman's Pañcaprakriyāである）。

ヴェーダーンタ学派の哲人シャンカラの思想研究を専門的に継続してきた筆者は、碩学T.M.P. Mahadevanにより出版された、シャンカラの主著『ブラフマスートラ注解』に対する二巻本《索引》[19]を長年重宝してきた。また、その独立の著作と見なされている、『ウパデーシャサーハスリー』には、わが師前田専学先生による批判的校訂テキスト刊本付録の充実した用語《索引》がある。さらに、もう一つの代表的な著作、『バガヴァッドギーター注解』には、Francis X. D'Saによる《索引》[21]が出版されている。シャンカラ研究を、原典の厳密な解読に基づいて遂行するための、極めて有効な参考書として、それらの種々《索引》が高く評価されてきたことは言うまでもない。学生時代、筆者は前田先生の指導の下に、ヴァーチャスパティミシュラの『タットヴァビンドゥ』全和訳&研究を志したことがあるが、その際にも、先生からは「出来ることなら、用語《索引》を作って付した方がよい」とのご指導を賜った。そして、費用節約のためにわら半紙を裁断して即製カードを作り、手書きでカード採り作業を行い、床の上で並べ換え、それをまとめて、タイプライターで打ち込み、《索引》を作った経験がある。[22]また、アルバイトで、『法華経』の《索引》作りに携わったこともあった。パソコン時代となり、電子テキストに基づいて、コンピュータに用語《索引》を作らせることを、筆者が切実に考えるようになったのは、そうしたことどもの影響もあったと考えられる。そして研究者の多様なニーズに応じ得る網羅的な優れた《索引》を効率よく作るためには、基になる電子テキストはどのような形をとる必要があるか？　と考えたのである。サンスクリット文献の電子テキストから、《索引》を自動的に生成するためには、電子テキストそのものが、《索引》に立項する用語の切れ目を持った形になっている必要がある、と考えた。連声による音の融合の結果、用語の姿・形が、文字列の中に埋没してしまっている点、さらに、複合語が多用されている点などが、サンスクリット文献の顕著な特徴と考えられるから、その電子化

に当たっては、とにかくも連声箇所に的確に切れ目を入れ、複合語は支分間に切れ目を入れること、にもかかわらず、入力に手間暇がかかり過ぎないことを配慮すべきである。[23] その結果として、筆者は、種々意見・事例を参考に、電子テキストの入力方式として、以下のような原則を打ち立てた。

(一)便宜的に散文テキストと韻文テキストとに分類する。前者の場合には、刊本テキストに従って、頁数、行数を、当該頁の本文テキストに先立って、それぞれ、“.p.＊＊＊”、“.l.＊＊＊”という形式で入れる。行数の記載がない場合には、第一行から。改行の際には、行の末尾にリターン記号を入れる。韻文テキストの場合は、各詩節末尾に、詩節番号(1a,1b,2a,2bや、I-1a,II-2aなど)と、当然ながらリターン記号を入れる。

(二)単語間は、半角スペースで区切る。連声で結合した母音は、“,”記号で分解する。

(三)複合語は、基本的に各支分を“.”で区切る。複合語内の各支分間の連声母音は、“,”で分解する。熟した下位の複合語がある時には、その支分間は“:”で区切る。

(四)動詞(定動詞、絶対詞、不定詞)の前には、“(”を付す。

(五)テキスト中の誤植指摘、異読などは、その単語の全体が終わった箇所に“[＊＊＊?]”の形式で挿入する。

(六)空行(リターン記号のみの行)を適当に挿入しても構わない。

(七)“#”で始まるコメント行を適当に挿入しても構わない。

使用文字は、既存のありふれたローマ字セット、翻字システムとして、いわゆるKH方式にしたがうことにした。そうしたゆるやかな原則に立って、その具体例として、先の電子テキスト二点は作成されたのである。

シャンカラと共に、筆者が常々関心を持ってきたのは、ミーマーンサー学派の巨匠クマーリラである。シャンカラに関しては、先に触れた通り、既に立派な《索引》が出版されていたが、クマーリラの方は、未だ手つかずであった。その著作の英訳は早くから、出版されていたものの、厳密な原典研究に不可欠と思われる用語《索引》が出版されていることは知られていなかった。筆者は、まずは、クマーリラの主著『シュローカヴァールティカ』の《索引》を作ることを思い立った。電子テキストがあれば、パソコンを使う研究者には、紙に印刷された《索引》は不要であるわけだが、電子テキストを作る。それに基づいて《索引》を作って出版し、その後で、電子テキストを公開したら、自分も学界も共に豊かに潤うに違いない、と考えたのである。そう、筆者の《索引》自動作成ソフトは、こうした展望の上に立って、構想されたのであ

った。『シュローカヴァールティカ』の電子テキストを入力作成する、その一方で、パソコン・ソフトを開発入手する。実際、筆者が予期したよりも遥かに短期間に、望んでいたソフトの方は完成した。そして、筆者の手入力になる『シュローカヴァールティカ』の電子テキストも、それに遅れること、程なくして完成した。むろんのこと、望んでいた《索引》もあっという間に完成を見たのである。[24] だが、完成した《索引》を出版して、『シュローカヴァールティカ』の電子テキストを公開するという筆者の当初の予定は、未だ、実現していない。その両者は、FDと筆者のパソコンのHD中にしか存在していない筈である。電子テキストがあれば、紙の上に印刷された《索引》は、実際はなくていい。むしろ嵩張る、そんな書物はない方がいいのかも知れない、と考えるようになったせいもある。ならば、思い切って、電子テキストの方を公開したらどうか？　そのことも、既に何年も、実行に移せないでいる、というのが偽らざるところである。火の山の滅びの罅裂に投げ込む目的で、長い辛い旅を重ねていざ辿り着くや、その指輪を投げ込むのが惜しくなった小英雄フロド・バギンズの心境と言えば、美化し過ぎだろうか？[25]

次には、SS-TOOLS自体について若干の説明をしておきたい。筆者の所蔵する自作電子テキストのうち、シャンカラとクマーリラの両者を橋渡しする存在マンダナミシュラの初期の重要作品『ヴィディヴィヴェーカ』を使って、紹介しよう。[26] 筆者の言う電子テキストとは、散文作品『ヴィディヴェーカ』の刊本の三八頁～四〇頁にある【図表A】のようなデーヴァナーガリー文字によるテキストに対して、【図表B】のように入力されたテキストを言う。「サンスクリット電子テキスト用《索引》高速生成ツール集」と言うべきSS-TOOLSが相手にするのは、そうした電子テキストであり、以下の六種類の単機能プログラムから成り立っている。[27]

（一）SSC.EXE　(Cutter)
（二）SSD.EXE　(Deleter of sanDhi-Dots)
（三）SSS.EXE　(Sorter)
（四）SSU.EXE　(Unifier)
（五）SSB.EXE　(Binder)
（六）SSF.EXE　(Filter)

特に重要なのは、（一）（三）（五）の三つのプログラムであろう。（一）は、所定の形式を持つ電子テキストから、《索引》の項目となる単語を切り出すソフトである。いわば、人間に代わって、面倒で骨の折れるカード採り作業をしてくれる。【図表B】の電子テキストに対して、MS-DOSプロンプトから、（一）を使って瞬時に得られたものが、【図表C】である。

【図表A】 *Vidhiviveka* of Maṇḍanamiśra (TaraPub.Ed)pp.38-40.

p.38
प्रैषादीनां लोके प्रतीतेस्तद्गतस्य तदुपाधेः सम्बन्धग्रहः।
p.39
तेषामेव तर्हि प्रतीतेः सम्बन्धज्ञानं न नियोगस्य। उपाधयस्ते न
शब्दार्थाः, व्यभिचारात्। प्रवर्तकस्तेष्वनुयायी शब्दार्थः। सर्वत्राऽपरि-
त्यागात्।
नैतत्सारम्। उपाधयश्चेन्मानान्तरसिद्धाः नैकस्तेष्वन्वयी प्रवर्तको
p.40
नियोगः। प्रमाणान्तरगोचरत्वात्तेषां सम्बन्धज्ञानं न तस्य। अविदित-
विषयस्य सम्बन्धस्य प्रत्येतुमशक्तेः। त एव च शब्दार्था विदितसङ्गति-
त्वान्नेतरे।

【図表B】

:p.38
praiSa.AdInAM loke pratItes tad.gatasya tad.upAdheH sambandha.grahaH /
:p.39
teSAm eva tarhi pratIteH sambandha.jJAnaM na niyogasya / upAdhayas te na
zabda.arthAH, vyabhicArAt / pravartakas teSv anuyAyI zabda.arthaH / sarvatra^a..parityAgAt /
:l.4
na^etat sAram / upAdhayaz cen mAna.antara.siddhAH na^ekas teSv anvayI pravartako
:p.40
niyogaH / pramANa.antara.gocaratvAt teSAM sambandha.jJAnaM na tasya / a..vidita.
viSayasya sambandhasya pratyetum a..zakteH / ta eva ca zabda.arthA vidita.saGgatitvAn
na^itare /

三頁にわたるたかだか八行に対して七〇枚のカードが採取されたことになる。紙面の都合で、三段組で記載されているが、その一行一行が、いわば手書きカードの一枚一枚に相当する。（三）は、（一）を使って切り出された【図表C】のような単語を、サンスクリットのアルファベット順に並べ替えをするソーティング・ソフトである。文字順を指定したSSS.ORDという名称の別ファイルを作っておき、並べ換えを自在に行えるので、サンスクリット以外の言語にもカスタマイズして使えるという、極めて実用性の高い優れたソーティング・ソフトである。（五）は、複数例ある同一語（形）カードを合集するソフトである。【図表D】が、その結果である。そして、フォントを希望のフォントに一括変換してプリント・アウトすれば、結果としての紙の上の《索引》の一応の完成である。その他の（二）（四）（六）は、《索引》のシェイプアップを支援するソフトと言うべきものだ。（二）は、立項される複合語の支分分離記号を取り除くソフト、つまり ´ ` : を消し去る為のものである。（四）は、同一行ないし同一詩節内に、同じ語が複数回現れる場合に、それを一本化するソフトである（場合によっては、出現頻度を（ ）内の数字で表すことが出来る。この諸作業から、出来上がりの《索引》は、重要なテクニカル・タームのみならず、頻出する接続詞などの無特性の単語に到るまでの一切の単語を網羅することになる。そこで、（六）は、《索引》として不要な単語を含む行をフィルターの如く削除するソフト、必要なら、それらを別ファイルにして書き出すことも出来る、なかなかに気のきいたソフトである。この場合にも、不要ないし別立て項目のリストを参照ファイル[28]として作っておく必要がある。apiとかcaとかtuとかvāとか言った頻出する不変化語などを、別ファイルに書き出すと、自分の都合・好みに合った、見やすい《索引》が得られるかも知れない。先述もした、本誌別掲の、『パンチャプラクリヤー』の《索引》は、このフィルターを通して、ややスリムになったものの実例と言える。

作られてから既に九年を経過したが、知る人ぞ知る！　中園昭彦氏によるSS-TOOLSは、今でも、バリバリに動く。[29] パソコンの性能が格段にアップしたせいで、それこそ、もうあっという間の早技である。試みに、本稿を書くに当たって、上記、杉田瑞枝さんによる『カーマスートラ』の電子テキストから、用語《索引》を作ってみた。電子テキストの入力方式が、やや異なっているせいで、SS-TOOLS用に、若干の整形・手直しを必要としたが、たいした手間ではない。あっという間にB5判二段組一〇〇頁ほどの《索引》が、完成。特殊な用語に満ち満ちて、難解きわまりない『カーマスートラ』の解読に、甚だ有用な参考書《索引》の完成。電子テキストに併記されているベナレス本の章立てを採用することに

【図表C】<SSC.EXE>

praiSa.AdInAM 38.1
AdInAM 38.1
loke 38.1
pratItes38.1
tad.gatasya 38.1
gatasya38.1
tad.upAdheH 38.1
upAdheH 38.1
sambandha.grahaH 38.1
grahaH38.1
teSAm 39.1
eva 39.1
tarhi 39.1
pratIteH 39.1
sambandha.jJAnaM 39.1
jJAnaM 39.1
na 39.1
niyogasya 39.1
upAdhayas 39.1
te 39.1
na 39.1
zabda.arthAH 39.2
arthAH39.2
vyabhicArAt 39.2
pravartakas 39.2
teSv 39.2
anuyAyI 39.2
zabda.arthaH 39.2
arthaH 39.2
sarvatra 39.2
a..parityAgAt 39.2
parityAgAt 39.2
na 39.4
etat 39.4
sAram 39.4
upAdhayaz 39.4
cen 39.4
mAna.antara.siddhAH 39.4
antara 39.4
siddhAH 39.4
na 39.4
ekas 39.4
teSv 39.4
anvayI 39.4
pravartako 39.4
niyogaH 40.1
pramANa.antara.gocaratv-At 40.1
antara 40.1
gocaratvAt 40.1
teSAM 40.1
sambandha.jJAnaM 40.1
jJAnaM 40.1
na 40.1
tasya 40.1
a..vidita.viSayasya 40.1
vidita 40.1
viSayasya 40.2
sambandhasya 40.2
pratyetum 40.2
a..zakteH 40.2
zakteH 40.2
ta 40.2
eva 40.2
ca 40.2
zabda.arthA 40.2
arthA 40.2
vidita.saGgatitvAn 40.2
saGgatitvAn 40.2
na 40.3
itare 40.3

【図表D】<SSB.EXE>

anuyAyI 39.2
antara 39.4 40.1
anvayI 39.4
aparityAgAt 39.2
arthaH 39.2
arthA 40.2
arthAH39.2
aviditaviSayasya 40.1
azakteH 40.2
AdInAM 38.1
itare 40.3
upAdhayaz 39.4
upAdhayas 39.1
upAdheH 38.1
ekas 39.4
etat 39.4
eva 39.1 40.2
gatasya38.1
gocaratvAt 40.1
grahaH38.1
ca 40.2
cen 39.4
jJAnaM 39.1 40.1
ta 40.2
tadupAdheH 38.1
tadgatasya 38.1
tarhi 39.1
tasya 40.1
te 39.1
teSAm 39.1
teSAM 40.1
teSv 39.2 39.4
na 39.1(2) 39.4(2) 40.1 40.3
niyogaH 40.1
niyogasya 39.1
parityAgAt 39.2
pratIteH 39.1
pratItes38.1
pratyetum 40.2
pramANAntaragocaratvA t 40.1
pravartakas 39.2
pravartako 39.4
praiSAdInAM 38.1
mAnAntarasiddhAH 39.4
loke 38.1
vidita 40.1
viditasaGgatitvAn 40.2
viSayasya 40.2
vyabhicArAt 39.2
zakteH 40.2
zabdArthaH 39.2
zabdArthA 40.2
zabdArthAH 39.2
saGgatitvAn 40.2
sambandhagrahaH 38.1
sambandhajJAnaM 39.1 40.1
sambandhasya 40.2
sarvatra 39.2
sAram 39.4
siddhAH 39.4

より、今日容易に入手出来る、筆者も所有・使用するベナレス本の、いわば完全《索引》である。筆者の手許には、“Word-Index to Vātsyāyana's Kāmasūtra (Preliminary Version)”との表紙付きの原稿が、いつでも製本して出版出来るように用意されている。

今や、電子テキストが一つ二つと増えて行き、《索引》が一つ二つ（一冊二冊？）と増えて行き、サンスクリット文献学者にとっては、いよいよ作業のしやすい環境が整備されてきた、という観がある。ついワクワクしてしまう。だが、それはただそれだけのことだ。テキストが揃っても、それを読むことをしなかったら、宝の持ち腐れである。《索引》とて同じこと。本というものは、読もうとしなければ、ただの紙屑と同じだ。読む人がいて、読める人が読んで初めて本も生きてくる。電子テキストの場合もまったく同じだが、『カーマスートラ』の僅か数行の解読に何時間も四苦八苦、難儀している研究者にとって、果たして、その電子テキストのあるなしは、どれほどの意味を持つだろうか？《索引》とて同じことだ。友人であるK大学のA氏が、当時、SS-TOOLSを使い回して有頂天になっていた筆者に向かい、「そんな凄い《索引》を作って、一体誰が使うんだろう」と言い放った。その言葉を、筆者は忘れることが出来ない。

電子サンスクリット格言・喩例用例事典

サンスクリット作品を読んでいると、いわゆる格言（ニヤーヤ：nyāya, laukika-nyāya, nyāya-ukti）に遭遇することがままある。[30] そうした場合、その格言の意味するところ、その使用例を、手軽に知ることが出来たら、どんなにか便利だろうと考えたことが、こうした電子事典を作ろうと思い立ったきっかけである。格言や喩えの類は、それを用いる側よりすれば、自分の言いたいことを相手に正しく伝えるため、相手の意味理解を助け促進させるためのものである。当然それ自体の意味が、自分にも相手にも自明であることが前提となっているのだが、時代も地域も大きく異にしている、現代のわれわれにとっては、逆にその格言や喩例の方が、謎めいて難解であり、困惑のタネになることが往々にしてある。格言や喩例本来の意味が、いつの間にか忘れられてしまったせいだ。格言や喩例とは、その使用者にとっても、自己の個人生活に深く結びついたものであり、地域性や時代性を色濃く反映したものと言える。したがって、成立年代不明の作品や匿名の作品の同定や、作品相互の関係や、著者の素性などを、学問的に検討する場合に、著者の格言・喩例の使用状況を把捉しておくことは、意外や重要な決め手を与えてくれる場合がままあるものだ。「意は似せやすく、姿は似せ難し」という

ことか？　哲学的な論議の内実は、いくらでも似せることは出来るが、そのプレゼンテーションに当たっては、つい、その人の地が出てしまう、個性が覗いてしまう、といった素朴な仮説に基づいてのものである。一つの格言が、同じような議論の中で、同じような意味合いで用いられている、それは、その作品相互の関係を論ずる際に、大きく役立つのではないか、と考えたのである。難解にして微妙な哲学的議論のさなかに持ち出される、格言・喩例を的確に理解することは、極めて重要である。にも拘わらず、それが軽んじられる場合が少なからず見受けられる。インド哲学文献の電子テキスト・データベースが充実してくれれば、筆者がここで言う事典の類の必要性は、減少するかもしれないのだが、現段階では、やはりそれに頼らざるを得ない、と考えた。こうした電子事典の作成を睨んで、ささやかながら、インド哲学の基礎文献の電子テキスト化のありようを模索し、ほそぼそと電子テキスト化を進める一方で、これまで筆者が机上に置いて常時活用してきた、紙の上の書物・参考書、興味尽きないG.A. Jacobsの一冊[31]を初めとする、以下の四点よりの入力電子化を完成させた。

(一) C. Jacobs, Laukikanyāyañjalih : *A Handful of Popular Maxims, Current in Sanskrit Literature*, Delhi, 1995 (Reprint Ed.)

(二) Chhaninatha Mishra, *Nyāyokti-kośa (A Dictionary of Nyāyas (Sayings) in Sanskrit)*, Delhi, 1978

(三) Vaman Shivaram Apte, "A Collection of Popular Sanskrit Maxims : Nyāya-saṃgrahaḥ", Appendix E of *the Practical Sanskrit-English Dictionary*, Kyoto, 1978 (Reprint Ed.)

(四) Pandurang Vaman Kane, "Appendix to Section VII Chap. XXX" of *History of Dharmaśāstra (Ancient and Mediaeval Religious and Civil Law)*, Vol. V Part II, Poona, 1977 (2nd Ed.)

これらを合集したものに、的確な和訳をも付し、それを基礎に、パソコン上で活用しやすい、『電子サンスクリット格言・喩例用例事典』のあり得べき姿を探し当てたいと念願しているところである。当初は、叩き台となるこの電子テキストを、HP上に公開し、その格言・喩例のサンスクリット文献中の使用状況を広く公に募り、大々的に調査したいと念願したのであったが、実際は、その電子テキストの整形に止まっているのが現状である。そうした作業をインターネット上で、遂行するのは、個人のレベルでは到底困難である。HPを管理して、時々刻々と増大していく情報を整理するだけで

も、大変な手間暇のかかることだろう、と想像される。一介のサンスクリット文献の研究者が、片手間でなし得るところではないと考えて、途方に暮れるばかりだ。筆者が関心を寄せるサンスクリット文献に限らず、種々の多岐にわたるデータベースの構築が、声高に叫ばれている中で、その作業が、環境やメディアの進展に比してやや遅々として進まないようなのは、こうした種々の制約があるからではないだろうか？結局パソコンの中に、仮にバベルの図書館が実現されたとしても、それを活用する側の研究者個人の事情には、さほど大きな変化はないように思われるのである。どんなに膨大な蔵書数を誇ろうと、それを利用する個人の立場からすれば、なにもかも煩わしい制約だらけだ。多様なニーズに応えるのが図書館だとしても、研究者個人のニーズには限りがあるということだ。研究者としての己の立場を棄てて、飽くまでも公の利益・学問の進展に寄与する覚悟なしに、そうしたバベル電子図書館の夢であれ、決して実現されることはないだろう。

さて、以上で、筆者に許された時間も紙数も尽きた。舌足らずで、意に満たず、内心忸怩たるものがある。十年という歳月の流れは、やはり大きい、との思いを改めて実感した。が、時代の進展に比して、個人の歩みはまことにのろい、との思いも新たにした。筆者が次に、この稿を起こすのは、いつのことになるだろうか？　またも十年後か？　筆者がたまらなく愛着を覚えるこのタイトル「パソコン時代のインド学」は、その時もなお有効だろうか？　複雑微妙に過ぎゆく人間的時間のただ中に佇んで、なお筆者の今の思いは、こうである。既にわれわれのパソコンは、一切の電子テキストの収蔵されたバベルの図書館である。だが今は、その一切の電子テキストへの欲望が希薄で、アクセスする方途を知らないだけだ、という一つのファンタジー。嗚呼、それよりもなによりも、梵英でも梵和でも梵獨でも梵仏でも何でもいい、重いことこの上ない机上の梵語辞典が、手軽にパソコンで使えるようにならないものか？　仮に電子モニエル梵英辞典[32]などが出回るようになれば、ファションに逆行するかの筆者でも、小型ノート型パソコンの携帯を、直ちに実行に移すのだが……

《註記》

(1) J・L・ボルヘス著『伝奇集』（鼓直訳　岩波文庫　一九九三年一一月）一一六頁。

(2) 『駒澤大學佛教學部論集』第二二号（平成二年一〇月）。

(3) 当時筆者はMS-DOS機種として国産パソコンと自作ＡＴ互換機の二種、アップル社製パソコン一種を使用していた。Ｅメールやインターネット・サーフィン、後に触れる《検索》や論文書きのためだけなら、マッキントッシュで充分だが、電子テキストを使った後出ＳＳ-ＴＯＯＬＳなど、小回りの

きく種々ユーティリティを使う必要から、MS-DOS環境を気軽に使用できる、ウィンドウズ・マシンも手放せない。また、機械自体の種類の豊富さ、コンパクトさ、軽快さ、なども、ウィンドウズ・マシンのセールス・ポイントだろうか？

(4)「パソコン時代のインド学」を発表したことが機縁となったのか、SS-TOOLSに関連して、何度か人前で話す機会を恵まれたが、東洋大学文学部印度哲学科主催の「情報化社会におけるインド哲学・仏教学」との講演会（96／09／19）で話してからも、既に四年が経過した。

(5)インターネット上などではCDなどによる販売を唄っているものがあるようだが、筆者はこれまでサンスクリット文献の電子テキストをお金を出して購入したことはない。ただ、Barend A. Van Nooten & Gary B. Holland, ed., Rig Veda : A Metrically Restored Text with an Introduction and Notes, Cambridge (Mass.) &London, 1994には、『リグヴェーダ』の全電子テキスト収録のFD1枚が付録として付いてきた。プリント・アウトした《書物》としてのテキストと同時にその電子テキストも併せ公開する、という一つの試みとして、注目に値しよう。パソコン・ユーザーなら、何よりも1枚のFDの方を歓迎するかも知れない。

(6)既存のローマ字セットを用いてのサンスクリット翻字システムも多様であるが、おおざっぱに言って、KH方式とTEXテキスト方式の二種に分類されるのではないか。これらの点に関しては、既に、多く語られている筈であるので、そちらを参照されたい。

(7)今筆者の手許にある『カーマスートラ』のテキスト刊本は、定評のあるベナレス本（KashiSktS. 29 : 1982 〈3rd Ed.〉）と二巻本ケーマラージャ・シュリークリシュナダーサ版（一九九五）とクリシュナダース・アカデミー版（一九九七）の三点である。さらに、後出、杉田さん使用のものと同一のニルナヤ版刊本のコピーも手許にある。

(8)岩本裕訳『完訳　カーマ・スートラ』（杜陵書院 昭二四年二月）。本書は、平凡社東洋文庫の一冊として復刻されている（一九九八年一月）。

(9)『占星術大集成（ブリハット・サンヒター）』（I・II）（矢野道雄&杉田瑞枝訳註 平凡社 一九九五年六ー七月）。訳註者は、後述するように、この《翻訳》に先だって、原典の電子テキストを完成された模様。現在それが公開されている。

(10)岡崎康浩氏によって公開されている『ニャーヤヴァールティッカ』の電子テキストは、“This Text is intended to be an index of Nyaayavaarttika.”と唄っている程である。

(11)サンスクリット文献の電子テキスト化が、必ずしも思うように進んでいないのは、拠り所となるテキスト刊本の多様さと、不首尾さも、一つの原因かも知れない。信頼のおける絶対のテキスト刊本に乏しいせいもあるかもしれない。なお、筆者の手許には、中谷英明氏が一九九七年三月一五日、日仏東洋学会総会(於東海大学)において発表された際の配布資料「古典学とコンピューターインド学の場合ー」があるが、サンスクリット文献の電子テキストについて考える場合、示唆的であった点を、付記しておきたい。

(12) R.P. Das & R.E.Emmerick, ed., *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā*: The romanised text accompanied by line and word indexes, Groningen, 1998.

(13) これらインターネット上に公開されているサンスクリット文献の電子テキストには、必ずと言ってよいほど、作成者・公開者によって、色々な記述が付されていて興味深い。例えば、徳永氏他によって作成された、一九六九年に出版されたT R. P. Kangleのテキスト（第二版）に基づいていると言われるカウティリヤの『実利論』の電子テキストファイルの冒頭には、以下のような文章が掲げられている。

This files is copyrighted by the members of the Joint Seminar (see below). They may be freely distributed and used for scholarly purposes, but anyone wishing to use the files for commercial purposes must apply to the copyright holders for permission to copy the file.

この文の中に現れる「著作権」"copyright"、「学術的な目的」"scholarly purposes"、「商売上の目的」"commercial purposes"、「著作権保持者」"copyright holders" などの語に注目すべきであろう。

(14) 小野基&小田淳一「ダルマキールティ著『プラマーナ・ヴァールティカ自註』総語索引」『辞典編纂プロジェクト叢刊』第六（一九九四年三月）、小野基&小田淳一&高島淳「ダルマキールティ梵文テクストKWIC索引」『辞典編纂プロジェクト叢刊』第八（一九九六年三月）。特に、後者は、パソコンを使用しないダルマキールティ研究者にも大いに資する、素晴らしい《索引》である。その編纂者に名を連ねておいでの高島淳氏には、SS-TOOLS開発にあたり、筆者も大いにお世話になった。常に啓発されることの多い氏に対しては、この機会に改めて感謝したい。

(15) 筆者の作成した『パンチャプラクリヤー』『パラマールタサーラ』の二電子テキストは、それぞれ、刊本Ivan Kocmarek, Language and Release: Sarvajñātman's Pañcaprakriyā, Delhi, etc., 1985, Henry Danielson, Ādiśeṣa, *The Essence of Supreme Truth (Paramārthasāra)*: *Sanskrit Text with Translation and Notes*, Leiden, 1980に基づいている。

(16) 前掲註(2)の拙稿四一一頁註(1)を参照。このネットに関しては、残念ながら、これまでに遂に紹介する機会を持てなかった。

(17) 紙数の関係で割愛する。註(11)を参照。

(18) SS-TOOLSは、一九九一年の夏休み中に誕生した《索引》作成支援パソコン・ソフト集であるが、それに先だって、中園昭彦氏によりSSI.EXEという索引生成ソフト（サンスクリット・スピード・インデックス）も試作され、公開された。が、これは、いわば一個の統合プログラムであり、種々の制約と、また予想される電子テキストの多様性に、そのヴァージョンアップでは対応しきれない、との判断の結果、新たに誕生をみたものである。筆者の我が侭な申し出に、無償で、この素晴らしいSS-TOOLSを恵まれた中園昭彦氏に、この機会に、改めて、心からの感謝を申し上げる。

(19) T.M.P. Mahadevan, ed., Word Index to The Brahma-

sūtra-bhāṣya of Śaṅkara, 2Vols, Madras,1971-1973.

(20)Sengaku Mayeda, Śaṅkara's Upadeśasāhasrī, Critically Edited with Introduction and Indices, Hokuseido: Tokyo, 1973.

(21)Francis X. D'Sa, ed., Word-Index to Śaṅkara's Gītābhāṣya, Pune, 1985.

(22)筆者の手作り『タットヴァビンドゥ』用語索引は、それでもかなり網羅的なものであったが、その後作成した『タットヴァビンドゥ』の電子テキストに基づいてSS-TOOLSを使って作られた《索引》(未刊)にとって代わられたことは言うまでもない。

(23)せっかく電子テキストを手入力して作成するのだから、多様なニーズに応え得るように、出来るだけたくさんの情報を、その中に埋め込んでおきたいと考えるのは、人情ではあるが、それが過度になると、電子テキストの入力作業が煩瑣となって、入力スピードも低下する、入力ミスの機会も増大する、といった点を、忘れるべきではない。

(24)『シュローカヴァールティカ』の電子テキストの底本として、今日簡単に入手出来て、かつ最も普通に用いられる、パールタサーラティの注釈付きの刊本(TaraPub.Ed., 1978)(=RatnaPub. Ed., 1978)を用いた。同刊本末尾には、一〇〇頁にも及ぶ、パーダ索引が収録されている。近年刊行された本多恵氏による《翻訳》『クラーリラの哲学』(上・下)(平楽寺書店一九九六年十月)の下巻末にも、八八頁にわたる、かなり精細な《索引》が付されている。運がよければ、近々陽の目を見るかもしれない筆者の作成した《索引》(未刊)は、B5版二段組で二〇〇頁になる。

(25)J・R・R・トールキン著『指輪物語』(瀬田貞二訳 評論社文庫 昭和五二年四月)などを参照。

(26)『ヴィディヴィヴェーカ』の電子テキストの底本として、やはり今日簡単に入手出来る、ヴァーチャスパティの注釈『ニヤーヤカニカー』付きの刊本(TaraPub. Ed., 1978)を用いた。この刊本には、遺漏脱落などが少なくなく、他のエディションで補う必要が多々あった。註(11)参照。

(27)最初、中園氏によって、作られたのは、SSC.EXE、SSS.EXE、SSU.EXE、SSB.EXEの四プログラムであった。次いで、SSD.EXEが、さらに、SSF.EXEが追加作成された。それぞれ、現段階でのプログラム最新版は、SSC.EXE、SSU.EXE、SSB.EXEがヴァージョン1.0、SSD.EXEが0.3、SSF.EXEが0.4、SSS.EXEが2.9まで。なお、SSS.EXEプログラムには、筆者と中園氏によるサンスクリットのソート順を指定した当初からの参照ファイルSSS.ORDの他に、半角カナソートのためのKANA.ORD、ローマ字ソートのためのROMAJI.ORD、全角いろはソートのためのZIROHA.ORD、全角カナソートのためのZKANA.ORDが中園氏によって作成され、公開されている。

SS-TOOLSの各プログラムは、電子テキストに対して、SSC-SSD-SSS-SSU-SSB-SSFといった順番などで連続して用いることによって、《索引》を生成することになる。詳細は割愛するが、筆者の場合、最低限の語尾処理の為の自

作スクリプトgobi.sedを用いた整形作業を、ＳＳＤとＳＳＳの間に行なっている。

(28)最初に公開された時には、筆者と中園氏による参照ファイルが、SSF.DATとして、添付された。

(27)今日どれほどに流布してどれほどの研究者が、このＳＳ-ＴＯＯＬＳを使用しているか不明であるが、MS-DOSプロンプトからの作業の可能な機種システムならば、どれでも問題なく使用できる。今後システムの進展などに応じて、手軽に使用できなくなる事態が生ずることも予想される。マッキントッシュ・ユーザーでＳＳ-ＴＯＯＬＳ使用希望者は、現時点では、それなりの方策を考ずるか、廉価なウィンドウズ・マシンを購入する必要がある。

(30)筆者は、この「格言」に関連して、これまで一度ならず論文を書いている。「kalpanālāghavaとkalpanāgaurava」『駒澤大學佛教學部論集』第一八号（昭六二年一〇月）五五四―五三二頁など参照。

(31)このG.A. Jacobsによる名著は、長らく絶版で入手が困難であったが、現在デリーから《The Vrajajivan Indological Studies, 2》として復刻されているものが、本文中の（一）である。だがそれは不十分な復刻と言うべきで、オリジナルのニルナヤ版とは、かなり齟齬が見られるのは、残念である。注意を要する。

(32)パソコンで使える、しっかりとした梵語辞典を待望する。もしかしたら、既に、ＣＤなどで市販されているのかも知れないが、筆者は、寡聞にして知らない。また、サンスクリット文献の電子テキストの（プルーフに有効な）スペルチェッカーなども、是非とも公開されんことを！　電子テキスト関連の、その他種々ツールも、既にあちこちに蓄積されていると考える。

（平成十一年度駒澤大学特別研究助成金研究の一部）